



家庭生活の実態調査を通して見た家庭科教育内容の
検討（第二報）：
衣生活における既製服の利用に関して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 公子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00002597

家庭生活の実態調査を通して見た家庭科教育内容の検討（第二報）

—— 衣生活における既制服の利用に関して ——

中 村 公 子

さきに著者は家庭科教育内容の検討の一環として、食生活における加工食品の利用を中心に実態調査を行い、食物領域の教育内容との関連を分析し報告した¹⁾。

今回は同じ目的のために、衣生活に関して特に婦人用既制服の利用を中心に調査を行った。わが国の衣生活における既制服の利用は、家計調査年報²⁾に示されるように日常着から外出着、下着から上着に至るまで近年顕著に増大し、家庭生活の中で徐々に定着しつつある。一方、家庭科被服領域の教育内容には、被服製作、被服整理等が含まれているが、終局の目標としては、より良い衣生活の管理、運営を計ることがあげられている。そのためには既制服はどのような位置におかれるべきなのであろうか。それらを認識すべく、実生活における既制服利用の実態を明らかにし、さらに家庭科の教育内容における被服領域の問題点を探る一指針を得たいと考えた。

1. 調査方法と調査対象

調査用紙は表1に示す通りである。まず既制服の購入に関して計画性、購入時の選択要因、バーゲンセールの利用、購入後の感想について問い、さらに既制服に対する満足度、不良品購入後の処理を問うた。次に流行について、その取り入れ方、知る手段、洋服における各部位の流行を質問し、最後に流行を取り入れることと相反関係ともなる着用を中止した衣服について、その理由、その後の処理の状態を問うた。調査は本学学生3名が担当し、戸別訪問の聞き取りで行われた。調査時期は1978年10月9日から11月4日である。

調査対象地区を表2に示す。対象者は総計431名の婦人用既制服を利用している主婦であり、なおこの3地区は、西³⁾により設定されたものである。

計算結果の集計には北大大型計算機を使用し、プログラムはspssによった。

表2 調査対象地区

対 象	地 域 の 特 徴	実 数
中 央 地 区	商店伝統型地域	125
旭 正 地 区	農村伝統型地域	25
朝 日 地 区	第1種混合型地域	50
旭 星 地 区	第2種混合型地域	120
東 光 地 区	マイホーム新興型地域	30
緑ヶ丘地区	アパート新興型地域	79

表1 調査用紙

衣生活に関するアンケート				
北海道教育大学旭川分校 家庭科教育学研究室				
I	年齢 満()歳	1. 30歳未満	2. 30~39歳	3. 40~49歳 4. 50歳以上
II	最終学歴	1. 新制中	2. 新制高	3. 短大, 大学 4. その他()
III	主婦の職業	1. 無	2. 有(aフルタイム bパート)	
		1. 労務	2. 職員	3. 自家営業(a非農業 b農業) 4. 自由業者 5. その他()
IV	世帯員数()人			
V	住 居	1. 持家	2. 給与住宅	3. 公営・公団住宅 4. 民間借家 5. 借間

I あなたは 主に次のような既製服をどのように買いますか。該当するものに○印をつけて下さい。

	日常着	外出着
1. 季節や年間の被服計画をたてて買う。		
2. 特に季節や年間の被服計画をたてず買う		

2. 時々後悔する。
3. あまり後悔しない。
4. 後悔しない。

V あなたは 不良品を購入した際、主にどうしていますか。次のうち該当するものに1つ○印をつけて下さい。

1. 購入した店でとりかえてもらう。
2. 消費者センターで 調べてもらう。
3. そのままにしておく。
4. 自分で直す。
5. その他()

VI あなたは 現在のような既製服をどう思いますか。次のうち該当するものに○印をつけて下さい。

1. とても満足している。
2. だいたい満足している。
3. 少し不満である。
4. 不満である。
5. その他()

1と答えた人以外はどこに不満があるのかを次のうちから選んで2つ○印をつけて下さい。

1. 流行の色, 柄の種類に限られている。
2. 流行の形, 丈の種類に限られている。
3. サイズ
4. 価格
5. 材質
6. 年齢に適したものがない。
7. 縫製

II あなたは 洋服を買う際、何を購入のめやすにしていますか。次のうち該当するもの2つに○印をつけて下さい。

1. メーカー(ブランド)品を買う。
2. 材質表示をみて買う。
3. 取り扱い表示をみて買う。
4. 安価であれば買う。
5. デザイン, 色あいをみて買う。
6. サイズをみて買う。
7. その他()

III あなたは 洋服をバーゲンセール(季節終りの値下がりも含む)を利用して買いますか。次のうち該当するものに○印をつけて下さい。

1. よく利用する。
2. 時々利用する。
3. あまり利用しない。
4. 利用しない。

IV あなたは 洋服を購入した後、どういう感想をもちますか。次のうち該当するものに○印をつけて下さい。

1. よく後悔する。

8. 品質表示の不備

9. その他()

VII あなたは この数年でまわりの流行の影響などによってスカート丈を変えましたか。次のうち該当するものに○印をつけて下さい。

1. はい 2. いいえ
3. わからない 4. その他()

VIII あなたは この1, 2年でギャザースカートを製作または購入しましたか。次のうち該当するものに○印をつけて下さい。

1. はい
2. いいえ
3. その他()

IX あなたは どういうところから洋服の流行を知りますか。次のうち該当する主なものに1つ○印をつけて下さい。

1. 広告（チラシ等）で知る。
2. 雑誌で知る。
3. テレビで知る。
4. 新聞で知る。
5. 周囲の人をみて知る。
6. 店頭で知る。
7. その他()

X あなたは 流行に関係なく着られる洋服もっていますか。次のうち該当するものに○印をつけて下さい。

1. すべてそうである。
2. ほとんどそうである。
3. 数枚もっている。
4. もっていない。
5. わからない。
6. その他()

VI あなたは 流行を洋服のどこでとらえますか。次にあげるものに1, 2位までの順位をつけて下さい。

	ブラウス	スカート	ワンピーススリーブ
1 材質			
2 色			
3 形(えり, スカートの, そで等)			
4 柄			
5 丈(スカート, そで, 上着等)			

VII あなたは 次のような洋服を着用しなくなるのはどういう理由からですか。次のうちから該当するもの2つに○印をつけて下さい。

	ブラウス	スカート	ワンピーススリーブ
1 流行の変化			
2 その洋服にあき る。嫌いになる。			
3 布の傷み, やぶれ, ほころび, 縮み			
4 体型の変化			
5 衣服の形くずれ			
6 変色			
7 しみ, 汚れの発生			
8 年令にそぐわな い			

XIII あなたは 着用を中止した洋服を主に現在どうしていますか。また希望としてはどうしたいですか。次のうちから該当する順に1, 2位まで順位をつけて下さい。

	現 状	希 望
1 焼却, すてる。		
2 そのまま保管		
3 他のものに作りかえる。		
4 他の人に使ってもらう。		
5 交換市やバザーを利用		
6 売 却		
7 その他()		

2. フェースシートの集計

調査対象者の性格は、年齢、最終学歴、主婦の職業、世帯員数、住居についてもとめたが、全体として、30歳代、新制高校卒、無職、世帯人員3～4人等が高い数値を占め、日本の標準的な生活レベル家庭の主婦であるのがわかる(表3)。

3. 既製服の購入

1) 衣服計画、購入時の選択要因およびバーゲンセールの利用

被服費の年次的な変化をみると、一世帯当り年平均一ヶ月間の被服費は対家計費ではその変化はほとんどないが、その内訳をみると、洋服の占める割合の増加が著しい(表4)。洋服のうち主な種類についてその購入数量も早いテンポで増加

表3 調査対象

項 目	区 分	実 数
年 令	20歳～29歳	103
	30歳～39歳	154
	40歳～49歳	106
	50歳以上	68
最 終 学 歴	新制中学卒	67
	新制高校卒	174
	短大・大学卒	76
	その他	114
職 業	有	125
	無	306
世 帯 員 数	2人以下	63
	3人～4人	245
	5人以上	123
住 居	持 家	210
	給与住宅	48
	公営・公団住宅	62
	民間借家	111
	借 間	0
計		431

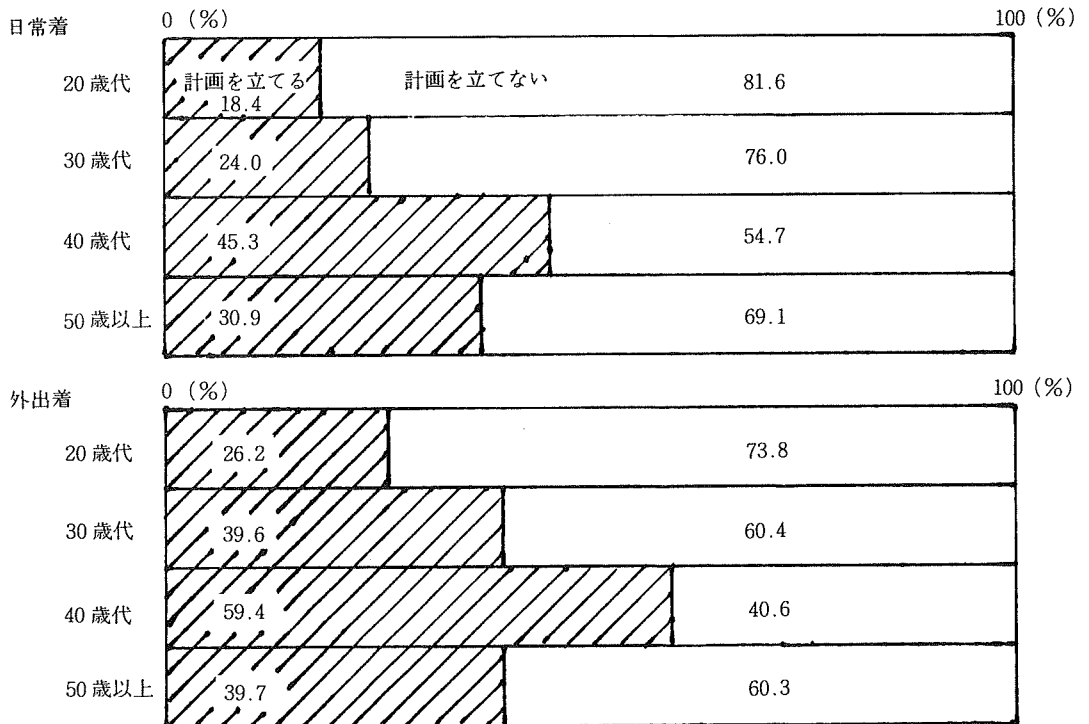


図1 既製服購入の計画性

表4 1世帯あたりの年平均1ヶ月の被服費と主な品目

年	被服費				対消費支出	被服費における和服の占める比率	被服費における洋服の占める比率
		和服	洋服	その他			
昭和39年	5,316円円円円	12.0%	...%	...%
41	5,893	11.2
43	7,049	651	1,852	4,546	11.1	9.2	26.3
44	7,695	728	2,084	4,883	10.9	9.5	27.1
45	8,629	848	2,379	5,402	10.8	9.8	27.6
46	9,604	950	2,674	5,980	11.0	9.9	27.8
47	10,504	995	3,193	6,316	10.9	9.5	30.4
48	12,838	1,242	3,989	7,607	11.5	9.7	31.1
49	14,992	1,308	4,773	8,911	11.0	8.7	31.8
50	16,631	1,438	5,630	9,563	10.5	8.6	33.9
51	18,430	1,575	6,465	10,390	10.5	8.5	35.1

家計調査年報（1976）による。比率については著者計算。

表5 1世帯あたり年平均の主な被服品目購入数量

年	婦人服	オーバー	ブラウス	スカート	セーター
昭和39年	0.549 枚	0.112 枚	1.37 枚	0.56 枚	0.84 枚
41	0.633	0.110	1.30	0.65	1.02
43	0.930	0.120	1.14	0.66	1.40
44	1.138	0.123	1.016	0.723	1.601
45	1.241	0.135	0.877	0.868	1.700
46	1.374	0.129	1.026	1.136	2.031
47	1.541	0.136	1.112	1.166	2.192
48	1.494	0.146	1.314	1.168	2.191
49	1.384	0.184	1.601	1.309	2.240
50	1.417	0.188	1.873	1.608	2.142
51	1.400	0.194	2.121	1.805	2.228

家計調査年報（1976）による。

を続けており、既製服の購入は今後ますます増大することが予想される（表5）。

既製服の購入が計画的に行われているか否かについての問に対する回答を整理して図1に示した。年齢層別の特徴は、日常着、外出着にかかわらず計画を立てて購入する割合の最も低いのは20歳代であり、30歳、40歳と年齢を増すごとに計画的な購入がなされることである。しかし、50歳以上になるとその割合は逆に低くなり、外出着についても同様の傾向がみられた。一方住宅種別にこれを検討すると、日常着について計画をたてて購入する割合は給与住宅、持家、公営・公団住宅、民間借家の順に低くなり、外出着についてもほぼ同様の傾向が認められた。被服費について石崎⁴⁾は、持家、給与住宅、公営借家、民間借家、借間の順に被服費の家計に占める割合は低下すると述べているが、本調査でもほぼ被服費の割合が高いと予想される順にその計画性についても高い傾向が窺えた。ところで、住宅種別は、年齢層との間に深い関係が認められるので、住宅種別と年齢層とについて同時に観察できるように集計してみた。すると、持家は、若年層に少なく、民間借家は高年層に少ないという相反の関係にあるが、持家に居住するものについても、民間借家に居住す

表6 調査対象者の学歴と住宅と年齢層及び既製服購入の計画性

年 齢	最 終 学 歴				住 宅 種 別				計
	新 制 中学卒	新 制 高校卒	短大・ 大学卒	その他	持 家	給 与 住 宅	公 営・ 公 団 住 宅	民 借 間 家	
20歳代	15 (4,4)	62 (13,16)	24 (2,7)	2 (0,0)	29 (6,9)	9 (2,2)	21 (6,6)	44 (5,10)	103
30歳代	45 (11,17)	72 (14,26)	30 (10,16)	7 (2,2)	63 (18,29)	22 (7,8)	27 (8,9)	42 (4,15)	154
40歳代	7 (3,2)	40 (15,24)	19 (9,13)	40 (21,24)	68 (33,42)	14 (7,9)	10 (2,4)	14 (6,8)	106
50歳以上	0	0	3 (3,3)	65 (18,24)	50 (15,18)	3 (2,2)	4 (0,1)	11 (4,6)	68
計	67 (18,23)	174 (42,66)	76 (24,39)	114 (41,50)	210 (72,98)	48 (18,21)	62 (16,20)	111 (19,39)	431

数字は実数を示す。カッコ内左は日常着について、右は外出着についての購入時の計画性を示す。

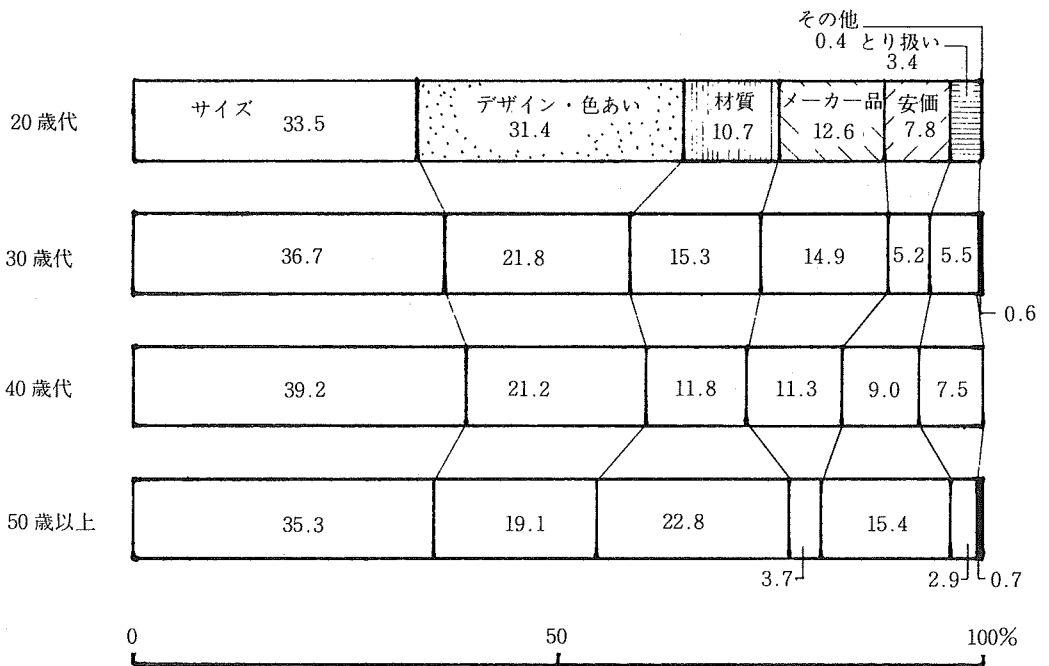


図2 洋服購入の際の選択要因

るものについても、年齢層によって大きな違いがあるが、同一年齢層については、20歳代の民間借家に住むものに計画的購入者が少ないということを除けば住宅種別による有意な差は認め難い。故に本調査からみる限り、住宅種別と衣服購入の計画性との関係は、結局年齢層の相違が住宅種別に投影しただけの問題であると考えられる。また最終学歴と衣服購入の計画性についてみると、短大・大学卒は20歳代を除くと極めて高い数値が示され、次に新制高校卒、その他学校卒、新制中学卒と順に低くなるのがわかる。これは衣服購入の計画性に学歴も十分関与していることを示すものであると思われる。結局、衣服購入に際して計画性があるかどうかという事は、年齢と、学歴が大きな要因となっていると言える。いずれにしても、40歳代と50歳以上の間には衣生活に対する姿勢にはっきりとした相違がみられた(表6)。図2は婦人用既製服購入の際の選択要因としての重点のおき方を示した結果である。最も高率を示したものは「サイズ」であるのは当然として、若年層では

表7 既製服購入後の後悔度

	よく後悔	時々後悔	小 計	あまり後悔せず	後悔せず	小 計	計
20 歳 代	28	48	76	21	6	27	103
30 歳 代	10	75	85	49	20	69	154
40 歳 代	7	47	54	39	13	52	106
50歳以上	10	27	37	19	12	31	68
計	55	197	252	128	51	179	431

数字は実数を示す。

表8 不良品の取り扱い

	購入店できりかえる	消費者センター で訴える	そのままにしておく	自分で直す	そ の 他	計
20 歳 代	43	3	46	9	2	103
30 歳 代	64	8	51	25	6	154
40 歳 代	37	8	37	24	0	106
50歳以上	13	1	27	27	0	68
計	157	20	161	85	8	431

数字は実数を示す。

「デザイン・色あい」を、高年齢層では「材質」を選択要因とするのが多い。本調査の予備調査結果から、約4割の主婦が既製服購入時に品質の表示、取り扱い表示を実際に考慮していることがわかったが、直接の選択要因は「デザイン・色あい」に満足するかどうかであった。さらにこの「デザイン・色あい」は、その時々流行を鋭く反映している場合がきわめて多く、結局主婦は企業によって作られた流行の範ちゅうでの「デザイン・色あい」による既製服を選択しているものと判断される。現代衣生活における流行とは、もはや個人の工夫、創作に端を発する場合はまれで、企業的に形成されるものであるのが上述の結果から一層明確となった。

年齢層別には、「サイズ」を除いて20歳代では「デザイン・色あい」が他の年齢層より非常に高く、次いで「メーカー品」であることが選択要因となっている。これに対して30歳代、40歳代では「デザイン・色あい」も高率の傾向を示すが、「材質」も高い。しかし50歳以上になると「材質」が選択要因の第一位を占め、しかも20歳代、30歳代、40歳代で主な選択要因とはならなかった「安価」であることに比重がかかっているのは特徴的といえる。戸吐⁵⁾も述べているように、50歳以上の主婦の多くは、洋服と和服を併用する場合は他の年齢層に比べて多く、その場合外出着、礼装用としては和服を用い、洋服は日常着的に用いることが多いものと思われる。「安価」が選択要因として高率となるのはこの事情によるものであろう。

バーゲンセールの利用は、全体として「よく利用」「時々利用」を合せて約6割となり、非常に利用度の高いことが窺えた。年齢層別の有意差は認められず、どの年齢層にも間断なく、利用されており、現代社会の着衣生活の一面を示すものと言える。

2) 購入後の後悔および不良品の取り扱い

結果を表7、表8に示す。「よく後悔」「時々後悔」を含めて約6割の主婦が購入後、後悔するとしており、頻度は全体としてきわめて高いと思われる。年齢層別に比較すると、20歳代は頻度も高く、それが不良品であっても「そのままにしておく」率も高い。しかし50歳代は「よく後悔」の率はやや高いが、不良品を「自分で直す」率の高い結果が示され、ここでも年齢による顕著な差が認

められた。不良品の取り扱いについて学歴別に検討すると、新制中卒、新制高卒、短大・大学卒は「購入店でとりかえてもらう」が高いが、いわゆる「その他学校卒」では「自分で直す」割合が高い。「その他学校」とは主に戦前の旧制小学校、女学校等のことであり、50歳以上がこれに該当する。これら旧制の学校では、女子には特に裁縫科を課し、しかも内容は普通、運針から始まり最後には羽織、袴、夜具に至るまでの製作が中心であった⁶⁾。そのような教育を修めたこれら50歳以上の主婦にとっては、針を持つこと、あるいは部分的に衣類を直したりすることは日常的なこととして身につけているのかもしれない。しかし、この「自分で直す」が次に高い率を示したのが短大・大学卒の主婦であったのは一見意外な感を与えたのを否めない。この点について今後さらに詳細なデータをとり、分析することは興味深いことである。「消費者センターで調べる」は全般的に低い数値を示したが、中でも短大・大学卒、新制高校卒が他に比較してやや高い数値を示した。これは学校教育の中から多少なりとも影響を受けているのか、あるいは一般にこれらの人は社会に目を向ける傾向が他に比較して強いための、いずれかの理由によるのだろうと考えられる。

3) 既製服における満足度

既製服の満足度は「だいたい満足」が41.8%で「とても満足」と合計して約6割の主婦が満足している結果が示された。一方不満の理由については、既製服が流行の形、丈、色・柄に限定されていること、サイズが多様性に欠けること、年齢に適したものがないこと、縫製の粗悪等が高い数値を示し、逆に価格、材質、品質表示の不備に対する不満は少ない結果であった。

年齢層別による差異をみると、20歳代では満足度が最も高く、年齢が高くなるほど満足度は低くなり、年齢による差が顕著であった。これらは、東京都在住の主婦を対象とした消費科学連合会の報告⁷⁾にみられる既製服の満足度においての結果とほぼ同傾向であった。

近年、婦人服の既製化は著しく進行し、従来オーダーマイドを中心としていたスーツ類、ワンピース類においても昭和40年頃からは60%以上が既製服となった⁸⁾。しかし、購買力あるいは中高年齢の体型の複雑化などの関係からか、既製服メーカーの主力は若年齢層に向けられ、それを中心とした体型、色合い、デザイン、材質に集中する傾向が強くなり、年齢が高くなるほど既製服に対する満足度は低くなると思われる。戸吐の調査⁹⁾にも示されているように、中高年齢であっても洋服着用は一般化しつつある現在、中高年齢者向けの既製服の問題はこれからの衣生活の一つの大きな課題となるであろう。

4. 衣生活における流行の現状

1) スカートおよび洋服における流行のとらえ方

衣服は本来、身体の衛生、保護と、審美、整容という機能を有する。しかし近年、いわゆる見せるための衣服としての後者が強調されている昨今である。スカート丈およびこの1～2年特に流行の目立つギャザースカートについて質問したところ、スカート丈については「変えた」が全体の約7割と圧倒的に高い数値を示している。ギャザースカートについても約6割の主婦がこの流行を取り入れており、主婦の流行への反応が数的に示された。さらに年齢層別には、スカート丈を「変えた」のは20歳代、30歳代とも約9割を示し、40歳代で約7割、50歳以上になると約2割であり、ここでも40歳代までと50歳以上では大きな差があった。しかしながらやはり最も流行を反映させているのは20歳代、30歳代である。

表9 流行にとらわれない洋服の所持量

	すべてそうである	ほとんどそうである	数枚持っている	持っていない	わからない	計
20 歳 代	2	24	63	12	2	103
30 歳 代	6	42	95	8	3	154
40 歳 代	12	53	36	4	1	106
50歳以上	27	39	2	0	0	68
計	47	158	196	24	6	431

数字は実数を示す。

主婦は洋服の流行を、何を指標に認識しているのだろうか。ブラウス、スカート、ワンピース・スーツについての結果から、スカートの流行は丈や形でとらえられ、ブラウス、ワンピース・スーツは形に最も反映され、同時に色、柄、材質にも注意が向けられていることがわかった。年齢層による違いは特にみられなかった。

2) 流行に関するマスコミの影響

情報化社会と言われている現代社会においては、多種多様な宣伝広告が様々な方法で家庭生活の中に到来し、それは衣生活に関しても例外ではない。流行をキャッチする媒体として、全体的には「雑誌」「テレビ」等が比較的高い数値であり、いわゆるマスコミからは55.7%の主婦が流行を知るという結果であり、当然のことながらマスコミの影響はきわめて大きいと言える。しかしながらマスコミの中でも新聞から知る率は予想外に低く、広告（チラシ）もまた低かった。これらは衣服の流行に関しての主な情報手段とはなっていない。前述のとおり、既製服を購入する際「デザイン・色あい」に最も関心の高いことを考え合せると、これら色彩的側面を十分に伝えることのできる「雑誌」「テレビ」がその主流であるのは最近の顕著な特徴と言える。今井¹⁰⁾も衣料品の購入行動には、感情的動機が働きやすく、流行品の発見、商品企画、販売方法などが情報活動と関係があると述べている。

年齢層別には40歳代以上とそれ未満には異った傾向がみられた。すなわち、20歳代、30歳代は「雑誌」「テレビ」からがきわめて高く、それぞれ約7割、約6割を示すが、40歳以上では「周囲の人」「店頭」からが57.6%であった。これは、特に流行に関心の高い若年層ほどいわゆるファッション雑誌を求め、高年齢になるに従い、これら雑誌を購入しなくなることで、従って必然的に若年層向きのファッション雑誌は多種販売されるようになるという相互作用に起因すると思われる。

3) 流行にとらわれない洋服の所持状況

流行にとらわれない洋服の所持についての結果を表9に示す。全体を通して「数枚持っている」が約半数と最も高く、「すべてそうである」は約1割であった。20歳代、30歳代は「数枚持っている」が約6割を示しているのに対して40歳代では「ほとんどそうである」が5割であり、さらに50歳以上では「すべてそうである」「ほとんどそうである」を含めると97.1%となり、極端に高い数値を示した。ここでも40歳未満と40歳以上の間には大きな差がみられ、これは前述のスカートの流行のとり入れ方において50歳以上では著しく低下することと呼応している。

年齢と衣服の流行についてさらに考察すると、50歳以上は和服と洋服を併用する割合が他の年齢層より高く、これらの人は年少の時代に和服生活の中で育ったといえる。和服は形態的には流行をとり込む余地は皆無に等しく、強いて流行を考えるとすれば、色、柄を考えることができるが、

昔からほとんど変化しない色、柄もあり、洋服に比較してその流行は非常に緩慢であり、範囲も限られている。和服生活の長い50歳以上の主婦は、このような流行感覚がいつの間にか身につき、たとえそれを洋服にあてはめて考えたとしても敏感には対応しきれない面があるのではないだろうか。現在20歳代、30歳代的主婦は、流行のめまぐるしい洋服環境の中で育っていることを考えると、これらの年齢の主婦が50歳ぐらいになった時には現在の同年齢の主婦の流行感覚とは違って、衣服の流行に関して現在以上に反応するようになるのではないだろうか。

5. 洋服の消耗と着用中止衣服の処理

1) 洋服の着用中止理由

昭和48年のいわゆるオイルショック以来、資源の節約利用が提唱されてはいるが、昭和30年来、国民生活の全般に行き渡った大量消費、使い捨て思考は基本的には変わらず、特に衣生活に関してそれは顕著であると思われる。

ブラウス、スカート、ワンピース・スーツの着用中止の理由についての回答を表10、表11に示す。関谷¹⁴⁾にならって、「流行の変化」「その洋服にあきる、嫌いになる」「年齢にそぐわない」を社会的消耗、「布の傷み、やぶれ、ほころび、縮み」「体型の変化」「衣服の形くずれ」「変色」「しみ、汚れの発生」を物理的消耗とした。ブラウス、ワンピース・スーツでは社会的消耗が着用中止要因として高く、スカートでは逆に物理的消耗が高い数値を示した。すなわちブラウス、ワンピース・スーツでは「流行の変化」が最も高く、ブラウスは着用頻度も高いことから「嫌いになる」が、ワンピース・スーツでは外出着であることから「年齢にそぐわない」がそれぞれこれに次いでいる。

さらに年齢層別では、ブラウスおよびスカートでは、若年齢ほど社会的消耗により着用を中止する割合が高く、これは流行の影響を受けやすい年齢層が若年齢層であることを考えると一致した結果と言える。いずれにしても、「変色」など極度の物理的消耗まで衣服を着用するということは一時代前の考え方であることが本調査でも一層はっきりした。

2) 着用中止衣服の処理

着用を中止した衣服の処理がどのように行われているのかの調査結果を表12に示す。「そのまま保管」が約4割の主婦にみられ最も高く、「焼却、捨てる」も約2割であった。「他の人に使ってもらおう」「交換市やバザー利用」は現在もまだ低い。しかし、現在とはともかく、意識として望ましいと考えている処理形態は「他のものに作りかえる」が約3割と最も高い。これは現在の衣生活における一つの矛盾を露呈した極めて興味深い結果と言える。なぜならば、この調査にも明らかのように一般に現代の主婦は既製服にある程度満足し、自家製作の必要性も認めなくなっており、製作技術を修得するの必要を感じていない。しかし、一方で社会的消耗度の高い、言いかえるならば物理的には極めて消耗度の低い衣服を大量にかかえている現状にあって「他のものに作りかえたい」希望が強いという実態なのである。「そのまま保管」が高く、「焼却、捨てる」「他のものに作りかえる」と続くのは20歳代から40歳代までで、50歳以上では、「そのまま保管」は同程度に高率であるが、次いで「他のものに作りかえる」が高くなっている。これは高年齢層ほど、彼等の受けた教育、時代の影響から品物を一つの財としてみなす傾向が強く、品物を捨てることに対する罪悪感が働き、「そのまま保管する」率は高くなることと思われる。そして他のものに作りかえてはじめて満足感が得られる傾向が強い。しかし若年齢ほど大量消費時代の感覚を持ち40歳代までと50歳代との間にここ

表10 衣服の着用中止理由 (1)

	ブラウス	スカート	ワンピース・スーツ
流行の変化	205	130	221
あきる, きれいになる	156	97	99
布の傷み, やぶれ, ほころび	138	75	29
体型の変化	106	154	142
形くずれ	59	112	104
変色	17	7	6
しみ, 汚れの発生	93	209	66
年齢にそぐわない	86	77	194
その他	2	1	1
計	431	431	431

数字は実数を示す。

表11 衣服の着用中止理由 (2)

	ブラウス		スカート		ワンピース・スーツ	
	社会的消耗	物理的消耗	社会的消耗	物理的消耗	社会的消耗	物理的消耗
20歳代	139	67	89	117	134	72
30歳代	175	133	121	187	198	110
40歳代	102	110	65	147	129	83
50歳以上	33	103	30	106	54	82

数字は実数を示す。

表12 着用を中止した衣服の現状及び希望

		20歳代	30歳代	40歳代	50歳以上
現 状	焼却, 捨てる	41	47	17	10
	そのまま保管	36	55	44	23
	作りかえる	13	24	19	27
	他の人に使ってもらう	13	21	13	6
	交換市, バザー	0	7	12	2
	売却	0	0	1	0
	その他	0	0	0	0
希 望	焼却, 捨てる	14	18	12	7
	そのまま保管	15	30	21	12
	作りかえる	38	46	25	34
	他の人に使ってもらう	12	26	19	5
	交換市, バザー	22	33	25	7
	売却	2	1	4	3
	その他	0	0	0	0

数字は実数を示す。

でも一線が画される。

この調査で知られる限り、現代衣生活の特徴は次のように把握することができよう。

1. 衣生活全般にわたって40歳代までと50歳以上の間には、意識、態度、考え方などに大きな差が示された。
2. 年間あるいは季節ごとの衣服計画に基づいて既製服を購入する主婦は一般に少く、その購入に際してデザイン、色あいを最も重視し、バーゲンセールで購入するのが極めて多い。
3. 既製服を購入して後悔する頻度も高く、特に若年層ほどそれが顕著であり、しかし一方で既製服にある程度の満足感が窺える。
4. 衣服の流行を積極的に取り入れている40歳代までの主婦においても、その情報は主として雑誌、テレビなどから入手していることが多い。また流行にとらわれない服の所持数も高齢層ほど多い。
5. 主婦は着用中止の衣服をそのまま保管している場合が極めて多く、それらを他のものに作りかえたいという希望は持っている。

6. 家庭科被服領域における内容の考察

ひるがえって小学校から高等学校までを含めて家庭科の教育内容をみると、いうまでもなく、家庭生活の様態と密接な関連を有している。戦前の家庭生活にあって必要な被服教育は被服の製作技術に極めて重点がおかれたものであった¹²⁾。しかし、社会の発展に応じて家庭内の製作の比重は減少し、生産と消費の分化は進み、さらに進行しつつある現在、衣生活の中で真に望まれているものは何であろうか。武井の調査¹³⁾によると、教師が必要と認め支持する家庭科被服領域の区分は、被服材料、被服管理、被服問題等であり、技能中心的教育内容よりも、社会との関連性や管理、経営能力など賢い消費者としての内容が求められている。現行の学習指導要領(昭和43年改訂)によると、小学校においては日常生活に必要な衣食住に関する基礎的な知識、技能の習得をあげ、中学校では生活における技術の習得を中心に科学的な理解へ導き、高校では家庭経営の立場から総合的に扱うことが中心となり、実践力へと結びつけようとしている。基礎的な知識、技能とは具体的にどの範囲のものを指すかとか、技術を中心とした科学的思考はどこまで可能かなど語義的な疑問も多いが、目標を全体的にとらえるならば、小学校から高校まで一応一貫性は保たれていると思われる。教育内容についてさらに検討を加えると、小学校の「内容」でも既に被服機能、被服材料、被服衛生、被服構成、衣生活の問題というように、衣生活における主な分野のすべてを盛り込んでおり、中学校においても分野的には変りがない。高校へ行くと、新たに衣生活の経営という観点から経済的な面、消費者としての立場からの衣生活をとらえている。これらは内容が具体的に示されて、昭和33年改訂(小学校、中学校)、昭和35年改訂(高等学校)版の学習指導要領からもり込まれている。しかしその改訂でそれまでの中学校の職業・家庭科は技術・家庭科に名称が変り、内容的にも製作技術を中心とした展開がむしろ強くなった。実際に、いわゆる被服の経営的な観点が教科書に題材として登場するのは昭和43年改訂の学習指導要領にそって出版された教科書からである。しかし、後述するようにその内容は微々細々たるものであり、今回の改訂(昭和52年)でこの点が大きく改善されているとも認められない現状である。

時間数をみると、小学校では5、6年で週2時間(年70時間)中学校では1、2、3年で週3時

間（年 105 時間）高校では週 2 時間で 1，2 年（年 70 時間）が標準であり，他教科に比較して少なく，しかもその中で被服領域の占める時間は実際に $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{6}$ となっていることを考え合せると，上述の内容を時間内に完全に消化しきることは極めて困難なことから推察される．この点からも家庭科の教育内容が実際に児童生徒の身につけにくい一面を持っていることを窺うことができる．

また具体的な教育内容を知るために，教科書についてみると，小学校では衣服の着方にはじまり，衣服の手入れなど衣生活における‘しつけ’とも言える内容から，さらにふくろやかバーの製作，衣生活の計画など非常に幅広い．小学校のみが男女一緒に家庭科を学ぶ唯一の機会であることを考えると，網羅的になりがちなのは止むを得ない側面かもしれないが，やはり実際の家庭生活に即して対応できるものを中心にして内容を展開する必要があると思われる．中学校，高校の教科書¹⁵⁾¹⁶⁾についてみると，衣服生活の現状と家庭科の教育内容との離反は一層著しい．例えば既製服に関する内容は中学では三学年に「被服と生活」3 時間扱いがあるが，その中の一部に既製服の選び方として簡単に触れられているに過ぎない．さらに高校の家庭一般についても同様であり，「被服費と被服計画」のところで「新調にあたっては既製服，半既製服を購入するのか，また材料を購入して自家製作をするのか，注文製作をするのか決める」と触れられているに過ぎない．また衣服の流行を扱った部分は皆無に等しい．購入に際しての計画性の低さ，流行に影響される度合いの高さ，衣服の社会的消耗度の高さ等に対応する教育内容とは言いがたい．流行などによる衣服の社会的消耗の進行は，家計における被服費膨張の問題，また狭小住宅と死蔵化衣料収納空間の問題，さらには繊維加工の発達に伴い化学繊維衣料の処理問題を起こしている現状である¹⁷⁾．また世界的にも生産状況の変化が起りつつあり，資源の節約などから消費が再考される時期に立っていると見える．これらの問題を解決するという観点で上述の内容を改めてみるならば，それらはあまりにも従来の内容に帰結し，個々散然としており，直接的に解決の力を養成するような教育とは言い難いと思われる．横山¹⁸⁾は捨てる前に利用の方法を考えたり，新しい用途を見いだしたり，不用品の交換をしたりなど，物財の効用を最大限に利用し，必要なものならばどんどん取り入れるのが新しい発展的な消費生活であると述べている．また内藤¹⁹⁾は家庭科の消費者教育の中に，被服領域のものとしては，被服消費の動向，既製服産業の形態，マーケティング戦略とファッション，被服計画と購入のしかた，被服の購入計画の費用計算，被服の買い方（現金，クレジット）等をもりこんだ内容を提唱している．このような経営的立場から被服領域に消費者教育的内容を充実させることは極めて重要なことと思われる．一方，被服領域における製作技術も欠くことのできない重要な学習内容と思われるが，実際の衣生活に対応でき得る応用範囲の広い製作技術について学習内容を構成することは必要不可欠のことであり，この二点を常に関連させて学習を展開するとより充実したものになると思われる．例えば昭和 52 年改訂の小学校家庭科における指導内容に新たに「小物作り」という内容が加わったが，これなども家庭で利用されないままになっている衣料から有効なものへの転換という観点から製作すると，新たな学習内容としての位置づけも可能となるように思われる．このような考え方は，今後の家庭科被服領域の大きな課題と言えよう．

稿を終えるにあたり，調査並びに spss の御指導とこの報文の校閲をして下さった北海道教育大学旭川分校岡本次郎教授と絶えず温かい御鞭達を賜った同分校家庭科教室の先生方に深謝の意を表します．なお調査に協力された本学学生清野三十子嬢，小田育子嬢，長谷川篤子嬢にも謝意を表します．

注

- 1) 中村公子(1978) 家庭生活の実態調査を通してみた家庭科教育内容の検討(第一報), 北海道教育大学紀要(第一部C), 29, 1.
- 2) 総理府統計局: 家計調査年報(1976)
- 3) 西勇(1975) 旭川市における住民意識に関する調査, 自治研究あさひかわ, 旭川市, P 2-59.
- 4) 石崎久美子(1977) 衣服の社会的消耗に関する考察, 家庭管理論研究, 札幌, P 65-68.
- 5) 戸吐光子(1978) 老人服の現状と問題点, 衣生活研究 4, 5, 1, 関西衣生活研究会, P 74-79.
- 6) 常見育男: 家庭科教育史, 光生館, 東京(1971), P 182.
- 7) 消費科学連合会: 消費者の経験にもとづく衣料品実態調査, 東京(1974).
- 8) 大塚佳彦: ファッション業界——産業界シリーズ——, 教育社新書, 東京(1977), P 111-229.
- 9) 戸吐光子(1978) 前掲書
- 10) 今井光映, 堀田剛吉: 家政経済学, 朝倉書店, 東京(1973), P 157-161.
- 11) 関谷嵐子(1976) 被服生活管理——序論, 被服生活分析の手がかりのために—— 家庭管理論研究, 札幌, P 32-33.
- 12) 常見育男: 前掲書
- 13) 武井洋子(1975) 家庭科の指導内容に関する意識調査(第一報)——被服領域の内容に対する必要度について——, 日本家庭科教育学会誌 17, P 25-31.
- 14) 斉藤健次郎, 吉松藤子, 岩崎芳枝: 小学校家庭科 5年, 6年, 開隆堂, 東京(1977).
- 15) 全国職業教育協会編: 技術・家庭女子用 1年, 2年, 3年, 開隆堂, 東京(1975).
- 16) 奈良女子大学家政学会編: 新編家庭一般, 実教出版, 東京(1973).
- 17) 石崎久美子(1977) 前掲書
- 18) 横山光子: 家庭経済学, 光生館, 東京(1978) P 166-199.
- 19) 藤枝眞子, 堀田剛吉, 内藤道子, 村尾勇之, 米川五郎: 家庭科教育における消費者教育, 学芸図書, 東京(1976)

(本学助手・旭川分校)